



ほっと
いっぷく

平泉寺こぼれ話 ～第34話～

平泉寺からの出土品です。
これは何処で焼かれたもの？

ヒント

- ①. 液体などを入れる甕の口の破片です。
- ②. 鎌倉時代のものと考えられます。
- ③. 表面はザラザラしており、主に肩部に灰が溶けた自然釉がかかっています。
- ④. 焼かれた場所は日本六古窯の一つに数えられます。

答えは最下段↓

えちぜんぜんじょうどうたんぼうき

越前禅定道探訪記 その16

市ノ瀬

市ノ瀬は、白山十二宿の内の第九宿で、「一之瀬」とも表記され、古くから白山登山者の重要な宿泊場所となっていたところである。ここが重要な宿泊場所となった理由はいくつか挙げられる。まず、市ノ瀬から白山山頂にかけては急な登りとなり、途中、本格的な水場がない。平泉寺を早朝に出発すれば、ちょうど一日で到着することができる距離にある。さらに古くから温泉が湧いていたようで、近世には白山登山者などの湯治場となっていた。天保4年（1833）に書かれた『続白山紀行』には、当時の一之瀬の様子が詳しく記されている。その内容を要約すると、「一ノ瀬村には家が十二軒あり、三・四十間離れて東西の二カ所に分かれている。平泉寺の役所は東側にあり、白山参籠小屋という。この村から三丁程行くと、別山道と御前道の分岐点がある。御前道は、柳谷川の一本橋を渡る。するとまた分岐点があり、右は大鳥居を経て白山の山頂へ行く道、左は白山温泉の湯本へ行く道である。湯本の入り口には茶屋があり、次に平泉寺の役所がある。温泉に入るには役所へ届け出る必要がある。そこでは、白山の御守りや白山縁起を売っている」とある。



市ノ瀬ビジターセンターと六万山

これらの村は、昭和9年（1934）年に襲った集中豪雨により壊滅的な被害を受け、その痕跡が全く失われた。

市ノ瀬からの禅定道は、正面の六万山（写真中央の山）の急斜面を登り、尾根伝いに、桧宿、剃刀岩、慶松平を経て山頂に向かう。

こぼれ話の答え：常滑焼：越前焼の生産が本格化する前に入ってきたものと考えられます。

国史跡平泉寺の整備情報誌

平泉寺かわら版

No. 42 (2012年3月号)



【発行】 勝山市教育委員会 史蹟整備課

【発行日】 平成24年3月22日

【ご意見・ご要望は下記まで】

電話： 0779-88-8113(直通)

メール： shiseki@city.katsuyama.lg.jp

3月17日の平泉寺世界遺産講演会 大盛況！



約230名の方が聴講。新たな平泉寺の実像に触れる。
平泉寺も城を築く。平泉寺で養われた石の文化・技術は一乗谷へ

今号の内容

【特集】 平泉寺世界遺産講演会2012

【連載】 平泉寺こぼれ話 第34話

越前禅定道探訪記 その16

平泉寺世界遺産講演会 2012

白山平泉寺とその時代 ―寺・城・居館―

講師：中井均先生（滋賀県立大学准教授 考古学）

- 15世紀は身構える時代。武士だけではなく、寺も農民も城を構えた。
- 平泉寺にも単独の城が築かれるが、それは都市といえる寺を守るためだ。
- 平泉寺には全国的にも古い石垣や石畳道があり、石の文化があった。
- 寺の石積みの技術は、武家に取り込まれ、近世城郭の石垣となる。
- 平泉寺の技術は、一乗谷朝倉氏の戦国城下町に受け継がれていくのでは。
- 平泉寺の発掘成果により、新たな中世史像が浮かび上がってきた。



熱心に話される中井先生



平泉寺北谷の砦跡



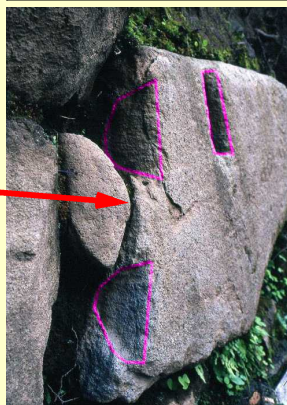
平泉寺南谷から発掘された矢穴を持つ石垣

中井先生はユーモアも交えながら、1時間にわたり、わかりやすく講演されました。

15世紀代（戦国時代）は、全国的に身構える時代で、武士だけではなく寺も農民も戦いに備えて城を構える時代であった。

寺が城を構えた事例として、敏満寺（滋賀県）や根来寺（和歌山県）、山科本願寺（京都府）など、中世の巨大な寺院があげられる。平泉寺も中世都市と呼べる巨大寺院で、正面に大規模な堀切、背後の北谷の尾根上には単独の城（砦）を持つ。また、15世紀代には大規模な土木工事を行い、石垣や石畳を整備しており、まさに石の文化があったといえる。石を切る、積むといった例は全国的に15世紀代の寺院に見られ、本来は別々の職人が関わっていたといえる。

今、お城というと、高い石垣をもつ城をイメージするが、これは1576年に築城した安土城以降である。このとき初めて土の城から石の城にかわった。こういった石垣は、寺院の技術が武家側に取り込まれたものである。平泉寺をはじめとする中世寺院の発掘調査は、新たな中世史像を浮かびあがらせる。



クサビを打ち込み、石を割るための矢穴。左の写真は、割る場所を変更したもの。平泉寺には、矢穴が2か所で見つかっている。ぜひ、探してみてください。

対談



対談 松浦義則先生（福井大学）×中井均先生
松浦先生

中世寺院はいろんな側面を持っていたが、中井先生のお話で平泉寺のもっていた城の側面が分かった。平泉寺は平安時代から武装しているが、城としてのスタートはいつか。

中井先生

日本の城は、南北朝期から爆発的に出現し、戦国期に多くつくられる。南北朝期の城は、騎兵に対処するため、自然地形を利用した山の高いところに築かれ、あまり山をけずったり、土を盛ったりしない。戦国期は、低い山に人工的な防御施設をつくり、石垣も出てくる。城の石垣は権力の象徴で、視覚的効果を高めるものといえる。

松浦先生

平泉寺の城は、こういった役割をもつのか。また、誰が計画してつくったものか。

中井先生

寺は谷につくられる。平泉寺は背後と側面に尾根があり、両手で囲まれたような形になる。寺を守るためには、周囲の尾根に何らかの施設をつくる必要がある。尾根の上の砦跡は、見張り場といえる。誰がつくったのかはわからないが、北谷の砦はかなりしっかりしており、素人がつくったものではない。横堀があることから16世紀代のものだろう。城は全国に3～4万箇所あるといわれているが、実際の戦いに使われたのは1～2割程度であろう。

松浦先生

平泉寺には石工がいたのか。

中井先生

滋賀県の例から、巨大な寺院には専門の石工職人がおり、平泉寺でもそういった人たちの痕跡が見つかるかもしれない。



会場からの質問もありました



ロビーの遺物を熱心に見入る来場者



ロビーには、これまでのかわら版を展示

来月4月17日（火）午後6時30分から、勝山ニューホテルでユネスコ前事務局長の松浦晃一郎氏をお迎えし世界遺産講演会を行います。是非お越しください。